

ストリートの「文化実践」からみる都市研究の可能性

山口 晋

◆要 旨

本稿では、まずストリートの文化実践を捉えるためのアプローチを整理する。具体的には、カルチュラル・スタディーズのサブカルチャー論における「抵抗から消費主義スタイル」への変化を跡付ける。次に、文化実践を捉えるための方法論的アプローチについて検討し、とりわけエスノグラフィックなアプローチの重要性を示したい。さらに都市研究の蓄積を豊かにするためのストリート研究のあり方として、「ストリートの歴史化」を提起したい。

キーワード：ストリート，文化実践，エスノグラフィー，都市研究

(2014年9月5日論文受付，2014年11月7日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

序

アーティストがストリートでの文化実践を通じてどのような空間を創造するのか、あるいはどのようなストリートを創造するのか、同時にそのような空間にはどのような諸力が交錯しているのかを記述することが求められる。その際には、都市のストリートを研究対象とする学問分野との「他流試合」も意識しつつ、経験的研究を積み重ねることが肝要であろう(山口2008a: 10)。

かつて筆者は「ストリートの地理」という展望論文でこのように結んだ。その論文では、都市のストリートをめぐる研究が増えているにもかかわらず、相互参照がされていないことを指摘し、空間利用、文化・社会史、行為主体の経験やネットワーク、実践と空間管理という4つの観点から研究を整理した。その後、上述のように、アーティストの「文化実践」によるストリートの(再)創造とそれに対する管理権力の動きをつぶさに捉えることの重要性を提起した。本稿は、それ以降のストリートをめぐるいくつかの研究と都市研究との交点について、理論的・方法論的観点から探りたい。そのために、まずストリートの文化実践を捉えるためのアプローチを整理する(Ⅰ章)。より詳しくは、カルチュラル・スタディーズのサブカルチャー論における「抵抗から消費主義スタイル」への変化を振り返りたい。次に、文化実践を捉えるための方法論的アプローチについて検討し(Ⅱ章)、

さらに都市研究の研究蓄積を豊かにするためのストリート研究の可能性を提示する(Ⅲ章)。ところで、本稿で使用する文化実践とは、後述するようにボーデン(2006)が提起した、スケートボーダーによる「都市エレメント¹⁾」の「流用²⁾(appropriation)」をも含む、アーティストの活動の総体である。ボーデンはルフェーヴル(2000)の「空間の生産」論に依拠しつつ、まとまった研究を発表しているが、その仕事についても次章で詳述する。

Ⅰ. 「権力ー抵抗」図式の相対化

時代がやや遡るが、バーミンガム大学現代文化研究センター(CCCS)の2代目所長であったホールは、1975年に共著の論文集『儀礼を通じた抵抗(Resistance through Rituals)』を発刊した。これがカルチュラル・スタディーズのサブカルチャー論の最初のまとまった研究成果となった。この論文集にはヘブディジやウィリス、チェンバース、マックロビーらが寄稿している。とりわけ、ヘブディジの『サブカルチャー』とウィリスの『ハマータウンの野郎ども』は、記号論的アプローチとエスノグラフィック・アプローチという違いはあれども、重要な研究成果であろう。ヘブディジ(1986)は、バルトの記号論やアルチュセールのイデオロギー論を分析視角として導入し、英国のテッズやモッズ、スキンヘッドなどの若者集団のスタイルに切り込んでいった。若者がいかにして音楽や

ファッションをアイテムとして身にまとい、自分たちの流儀にあったものにしていったのかを描き出したのである。ヘブディジはこういった行為を「カットアップ」と述べ、マスコミの喧伝や支配的なイデオロギーに対する「象徴的闘争」であると論じた。また、ウィリス (1996) は、イギリスの職業訓練校に通う労働者階級の不良男子生徒 (野郎ども) へのフィールドワークから、かれらがどのように中流階級の学校の価値観を拒絶して「反学校文化」をつくるのか、それにもかかわらず、かれら自らが肉体労働に重きをおく労働者階級になっていき、結果的に資本主義社会の秩序の安定に貢献してしまうという逆説をエスノグラフィックに描出した。しかしながら批判もある。上野・毛利は「果たしてパンクやレゲエの文化に帰属する若者たちは本当に「象徴的抵抗」として自らの文化を位置づけていたか」と疑問を呈する (2000: 121)。そもそも、上野は「サブカルチャーに先見的に「抵抗」や秩序の転倒を見出すことは本質主義的な誤謬」であると断じる (2001: 209)。それでは「権力-抵抗」図式ではない、あるいはそれ以降の枠組みとしてどのようなものがあるのだろうか。例えば、Thornton (1995) はブルデューの「文化資本」を援用しながら、「サブカルチャー資本 (subcultural capital)」という概念を構築した。Thornton はクラブの若者への参与観察から、音楽やファッションに関する知識の多寡、身につけるもの、行動様式などが、クラブでの若者のクールさやヒップさを決定し、場合によっては報酬も与えられるという権力関係や上下関係を解明したのである。消費社会化が進行していくことによって、「権力-抵抗」といった二元論では現代社会の文化を捉えることは難しく、ミクロな空間における微細な権力関係を経験的に探求することが求められるのであろう。ここで、ストリートの若者の文化や諸実践に戻ると、例えば、ボーデンが対象としてきたスケートボーダーも都市の公共空間を再定義し、その空間を物理的にも、概念的にも占有することで、さまざまな軋轢を惹起させてきた。とりわけ、公的領域と私的領域が遷移するようなところでは、スケートボーダーにはホームレスが経験するような「空間的ポリティクス」すなわち、空間管理者による排除や法規制を受けるといふ。「都市の管理者」は路面やベンチに凹凸や垂直の仕切りなどの「仕掛け³⁾」を設置してスケートボーダーが滑走できなくしている (ボーデン, 2006: 327-329)。こういった管理強化がなされるのはスケートボーディングが空間的、時間的に拡散し、移ろいやすい、分散した実践であるために、違法行為として規制することが困難だからである⁴⁾。ボーデンの『スケートボーディング、空間、都市-身体と建築-』の訳者の一人である矢部恒彦も日本における「スケーター」の実践について興味深い研究を進めている。矢部 (2002) はスケーターが行政な

どの空間管理者に直接的に抵抗、対抗するのではなく、都市空間を一時的に、有利に利用することを提示する。こういったスケーターによる「都市空間の流用」は、「つかのまの利用」を重ねていく実践なのだが、スケーターの多くは「つかのまの利用」と「継続的な占有」との違いを意識しないがために、騒音やごみなどの問題によって行政や地元住民との軋轢を生み、最終的にはパークの使用が禁止されるという (矢部 2004: 35-36)。他方、そのような事態を避けるために、スケーターは管理側と対話し、平和的に交渉する「お目こぼしを勝ち取る戦略⁵⁾」を駆使する (2002: 78-79)。

II. エスノグラフィック・アプローチの重要性

拙論 (2008a) 以降で、ストリートをめぐる研究成果としてまとまっているものが関根康正編『ストリートの人類学 上下巻』(国立民族学博物館調査報告)であろう。人類学、社会学、地理学などの分野から多面的にストリートを捉え返している。この論集の総括として関根 (2009) は、タイトルにエスノグラフィーを掲げている、吉見俊哉・北田暁大の『路上のエスノグラフィー』に対して、相当厳しい批判をしている。少し長いが引用したい。

『路上のエスノグラフィー』という本が吉見俊哉と北田暁大によって編まれている (吉見・北田, 2007)。序文には、「路上のダイナミズム」は、個々の主体による空間の再解釈、領有の営みである以上、客観的に観察できるようなものではなく、都市に内在し身体的に空間へと投企するなかで感じ取られるようなものであるとされ、路上を内在的に理解することが肝要だと説かれる。それに異論はないが、エスノグラフィーと名乗るなら、本文の内容は序文に追いつかない羊頭狗肉と言わざるを得ない。ストリート・アーティスト、ちんどん屋、サウンド・デモ、グラフィティ・ライターだけをそれほど深くなく扱っているだけで、内在的に路上をメディア論的に描いたエスノグラフィーだと言われても説得力はない。結局この本は、すでに批判の多い不十分なカルチュラル・スタディーズ系の内容にとどまり、何よりも社会空間の境界性が浮かび上がってくるような構造的な対象への吟味もなく、問題への取り組みの深刻さも足りない。そうなるのは、社会調査実習のお勉強のレベルで、誰にとっての問題を語りたのか、主語が不明だからである。人間よりも都市が主語の若林幹夫を批判したことがあるが、このどこか超越的な主語無し論は、東京大学社会学の伝統なのであろうか。ジャーナリズムに乗った編者の名を借りて実習

報告書を世に公刊するのは、もう少し慎重であるべきであろう（関根 2009: 555-556）。

批判というよりも非難に近いかもしれないが、主張はもっともであろう。かつて佐藤（2002）はフィールドワークと最も縁遠いものが、1回きりの調査である「ワンショット・サーベイ」であると批判した。吉見・北田（2007）の記述も後者に近く、エスノグラフィーとしての記述の分厚さに欠けるのであろう。このような関根（2009）の主張を踏まえた上で、どのような研究の方向性が志向されるのであろうか。エスノグラフィックなアプローチはたしかに方法論レベルでも重要なのだが、それ以上に対象との向き合い方や立場性（positionality）も含めた、研究のかまえの方がより重要であろう。さらには、批判理論や社会理論と接合するような「思想としてのエスノグラフィー」が求められるのではないだろうか。ところで、ストリートでの文化実践を、行政が特定の時間、空間に囲い込んで管理する動きとして、東京都の文化政策で大道芸ライセンス制である「ヘブンアーティスト事業」がある。筆者もこの事業に対する東京都の文化行政の意図や思惑を、議会議事録から明らかにしたり（山口 2006）、そのような管理側の動きに対してヘブンアーティストが時には不満を漏らし、時には事業を利活用したりするような「したたかな」文化実践を展開したりすることを記述した（山口 2008b）。アーティストの実践は都市行政の思惑と一致したり、ずれたりしながら展開していく。こういった実践は、関根（2004）が「受動の主体性」と論じる、インド・チェンナイにおける「歩道生活者」の日常生活実践とも重なろう。歩道生活者の「受動の主体性」とは、都市計画や都市美観の動きに翻弄されつつも、そのような動きを逸らすような点に特徴がある。さらに、そのような実践はアンダーソン（2003）の秀逸な都市のエスノグラフィーで指摘された、ストリートから得られた戦術的な知恵や暗黙のルールである「ストリート・ウィズダム」とも関連する。こういった行為主体の経験や実践に着目する研究は、近年の人文地理学の方法論的潮流にも合致するし（福田 2009）、その一方で、素朴な記述ではなく、社会理論や文化理論を踏まえた上でアクチュアリティに対して批判的に切り込んでいくことがますます求められる（大城 2010）。また、松田・川田（2005）はエスノグラフィーの今後の展開として、「エスノグラフィーの歴史化」、「エスノグラフィーの政治化」、「エスノグラフィーの日常化」という3点の必要性を示している。まず「エスノグラフィーの歴史化」とは、人類学者や社会学者がフィールドワークを行うのは、現代における異文化領域の現実である。しかしながら、その目の前にある現実には歴史の積み重ねによって立ち現れたものであり、その歴史性を読み解くことなしでは現代エ

スノグラフィーは成立し得ない。関係性の歴史を射程に入れる必要があるのである。次にこれまでの人類学的フィールドワークでは、対象社会を客観的に分析し、実証的に記述することが求められてきた。立場性に注意を払う必要があるものの、これからはフィールドの社会が直面する難題に「余所者」として身を引くのではなく、さまざまなかたちでコミットメントし、その難題の絡み合いを記述するエスノグラフィーが求められる（エスノグラフィーの政治化）。最後に、「エスノグラフィーの日常化」である。フィールドで出会うのは「ふつう」の人々の「ふつう」の生活である。リーダーやエリート、ヒーロー／ヒロインに吸引されるのではなく、「ふつう」の人々の日常生活に潜む歴史性や政治性を浮かび上がらせ、そこから見えてくる創造性や抵抗性のメカニズムを析出することが求められる。また、これら3点は重なり合っており、いずれも重要であるが、本稿では「エスノグラフィーの歴史化」に着目したい。『コリアンタウンの民族誌』の著者である原尻英樹が述べたように、民族誌調査では文献データとフィールドデータとの往復と既存の諸学の記述・分析内容の再データ化がますます求められるという（原尻 2000）。これは上述の松田・川田（2005）の「エスノグラフィーの歴史化」ともつながるものである。次章では、ストリートをめぐる研究に「エスノグラフィーの歴史化」という観点がどのような視座を与えうのかを素描する。

Ⅲ. ストリートの歴史化

エスノグラフィーとは異なるものの、以前、水内（1994）は「都市空間の断片」と呼ばれるスラム、寄せ場、盛り場、遊郭、商店街、市場、郊外住宅といった社会空間、あるいは生きられた空間として読むことを地理学の有力な研究課題とした。これらの空間は歴史的・社会的・文化的に有意義な空間であり、それらに切り込み、事例研究を積み重ねることが重要である。さらに、成田（1991）を補助線として、水内（1994）は民衆運動の街頭性が都市の空間構造とどのようにかわるのか、それらの運動が都市空間との対峙からどのような運動論を生み出したのか、といったことが重要な研究テーマとなり得るとしている。街頭や路上と同様にストリートも「都市空間の断片」として読まれるべきものであり、その際の方法論として示唆的なものが山口（2001）である。

山口は「『都市内のある特定の閉鎖的な『場所』を占めるリジッドな社会集団の共時的記述』ではない方法」で「個々人が集団を想像＝創造し、自らをある特定の社会集団の一員とみなすのはどのような生活状況においてなのか、空間は人間関係にいかにか影響し場所はどのよう

に立ち現われてくるのか、特に都市というコンテキストにおいてはどうか」について記述することの重要性を提起した(2001: 89)。その際のキーワードが、個人とネットワーク、場所であり、山口(2001)によると、それらの中で揺れ動く複雑な人間関係は、ある状況下では明確な集団として凝集することがあり、時に特定の空間スケールを持つ場所に根づくのである。さらには、こうした場所がいかなる空間スケールで形成されるかは都市社会地理学の研究課題となろうし、その歴史的形成過程は民族誌によって記述されることになるという。山口は控えめに「民族誌では近代都市を作り出す一次的な資本主義システムそのものを描出することはできないが、そうしたコンテキストにおける個々人の運動の中で集団や場所が二次的にいかに構築され解体するか、それが一次的システムにどのような影響を及ぼすかといった都市の諸相は捉えられるかもしれない」と述べている(2001: 105)。だが、山口の提起の通りであるし、異なる地理的スケールにおける場所の差異の探求や社会経済的条件の場所への影響およびその相互作用についての研究はまだまだ少ないであろう。スタティックとしてではなく、コンテキストとしての場所をいかに捉えるのか、その際の地理的・時間的スケールはどうであるのかを考えつつ、経験的な研究を進めていく必要があるし、地理学からの参入が求められているのである⁶⁾。

結

これまで都市のストリートをめぐる問題系を筆者なりに整理してきた。ストリートをめぐるミクロな空間での権力関係の機微をエスノグラフィックに記述していくことの重要性やその際の共時性を所与のものとしなない研究のかまきが重視されている。そうであるならば、同じストリートにおける文化実践をあつかう研究でも五野井(2012)の「オキュパイ・ウォールストリート運動」や「祝祭としてのデモ」は研究の目的が異なるからかもしれないが、やや違和感を覚える。それは関根(2009)による吉見・北田(2007)への痛烈な批判と同様に、五野井の仕事もどこか上空飛翔的であり、デモという運動と都市空間とのかかわりや運動に参与する行為主体と空間との相互作用が見てとれないからである。また、毛利(2009)はストリートには支配への抵抗の「可能性」があり、旧来の左派の運動ではない「マルチチュード」や「サウンド・デモ」などの重要性を「ストリートの思想」として提起する。たしかに、そういった実践は批判しないし、重要であると考えられるが、他方で、そういった実践の担い手は目立つだけで、ごく一部なのではなかろうか。少なくとも、実際のストリートという物理的空間

で活動しているアーティストは、「平和的」で、「ささやかな」実践を日々繰り返しているのではなかろうか。例えば、成瀬(2012)が描出する下北沢のミュージシャンの音楽実践とそのネットワークはまさにその通りであり、記述的な研究ではあるものの、こちらの方が好感が持てる。また、毛利(2003)が断言した「おぞましいまでの試み」としてのヘブンアーティスト事業も、この事業を選択的に活用するアーティストのしたたかな文化実践もあることから、一面的に批判するだけでは、その批判は上滑りするだろう。最後に、地方から大都市への出郷者研究をしている山口(2001)を再度引用したい。

(出郷者・移住者)の移動や運動をある時点での共時的な一断面によって把握するだけでは不十分であろう。「ミクロとマクロの統合」や歴史のプロセスはここでも重要な意味を持つのであり、つまるところ、それが「都市の民族誌」となるのである(山口2001: 105)。

こういったエスノグラフィックな記述の分厚さは、ストリートをめぐる研究のみならず、確実に都市研究の分厚さにつながると考える。地理学のみならず隣接諸科学からの研究アプローチがこれまで以上に求められよう。

付記

本研究には平成25年度科学研究費補助金(若手研究B)、平成24年度目白大学特別研究費の一部を使用した。

注

1. スケートボーダーが利用するベンチや縁石、手すりなど70種類以上もの建造物ことである(231-232)。
2. 「流用(あるいは再流用)」とは、一時的にエレメントを借用、引用または盗用することで新しい使用法を創造することである一方で、「転用」とは永久的な使用又は機能の転換のことを意味する(ボーデン2006: (10))。さらに、この「流用」される空間とは「ストリート、小さいロータリー、都市広場、小さいショッピングモール」といった「日常空間」であり、ルフェーヴルの言葉を借りれば、意味や象徴性を欠く「零度の空間」である(242-243)。
3. このような建造物は、かつて丹羽(1998)が指摘した、野宿生活者に対する排除意識の「空間的表現」そのものである。
4. Thrift(2000)も同様の指摘をしており、都市のストリートで活動するスケートボーダーやブレイクダンサーが「都市空間の新しい地理」や「常に変化している隠れた地理を目立たせる」がゆえに、厳しい取り締まりの対象になるという。
5. 拙論(2009)でも、同様の戦略や場所を見出すことができた。大阪・湊町にあるOCATの「ポンテ広場」に集まるストリート・ダンサーは管理者に対して礼儀正しく振る舞い、ダンスイベントの開催の許可を得たり、ごみなどを散らかさない、裸で踊らないなどの暗黙的なルールを決めたりして、管理者と友好的な関係を構築しながら活動している。その一方で、ポンテ広場は集客力が低下したOCATにある多目的広場だが、周囲の再開発の動きにより、その用途を容易に変更できるようになっており、今後、ダ

ンサーが活動する空間として継続するかは未定である。

6. このような視角を有する研究はまだまだ少ないと考えられるが、戦後の闇市やバラック飲み屋街と戦後の都市計画とのかかわりを描いた初田（2011）や地方都市を含む都市の「細街路」が音楽文化や若者文化を揺籃し、創造したことを示した増淵（2012）の研究も注目されよう。

参考文献

アンダーソン, E. 著, 奥田道大・奥田啓子訳 2003. 『ストリート・ワイズー人種／階層／変動にゆらぐ都市コミュニティに生きる人びとのコードー』ハーベスト社. Anderson, E. 1990. *Street Wise: Race, Class, and Change in an Urban Community*. Chicago: the University of Chicago Press.

ウィリス, P. E. 著, 熊沢誠・山田潤訳 1996. 『ハマータウンの野郎どもー学校への反抗・労働への順応ー』ちくま学芸文庫. Willis, P. E. 1977. *Learning to labour: How working class kids get working class jobs*. London: Ashgate Publishing Ltd.

上野俊哉・毛利嘉孝 2000. 『カルチュラル・スタディーズ入門』ちくま新書.

上野俊哉 2001. 学び／まねび逸れる野郎ども（承前）. 10+1 25: 205-214.

大城直樹 2010. 学会展望 学史・方法論. 人文地理 62-3: 253-255.

五野井郁夫 2014. 『「デモ」とは何かー変貌する直接民主主義ー』NHK ブックス.

佐藤郁哉 2002. 『フィールドワーカー書を持って街へ出ようー』新曜社（初版 1992）.

関根康正 2004. 都市のヘテロトポロジーー南インド・チェンナイ（マドラス）市の歩道空間からー. 関根康正編『〈都市的なるもの〉の現在ー文化人類学的考察ー』472-512. 東京大学出版会.

関根康正 2009. 総括ー『ストリートの人類学』という批評的エスノグラフィーの実践と理論ー. 国立民族学博物館調査報告 81: 519-556.

成瀬厚 2012. 街で音を奏でることー2005年あたりの下北沢ー. 地理科学 67: 1-23.

成田龍一 1991. 近代日本都市史研究のセカンド・ステージ. 歴史評論 500: 188-205.

丹羽弘一 1998. 路上からの地理学ー大阪ミナミからニシナリ釜ヶ崎へー. 荒山正彦・大城直樹ほか編『空間から場所へー地理学的想像力の探求ー』178-197. 古今書院.

原尻英樹 2000. 『コリアンタウンの民族誌ーハワイ・LA・生野ー』ちくま新書.

福田珠己 2009. 学会展望 学史・方法論. 人文地理 61-3: 209-211.

ヘブディジ, D. 著, 山口淑子訳 1986. 『サブカルチャー』未来社.

Hebdige, D. 1979. *Subculture: The Meaning of Style*. London: Methuen & Co Ltd.

ボーデン, I. 著, 齋藤雅子・中川美穂・矢部恒彦訳 2006. 『スケートボーディング, 空間, 都市ー身体と建築ー』新曜社. Borden, I. 2001. *Skateboarding, Space and the City: Architecture and the Body*. Oxford: Berg.

増淵敏之 2012. 『路地裏が文化を生む！ー細街路とその界隈の変容ー』青弓社ライブラリー.

松田素二・川田牧人編 2005. 『エスノグラフィー・ガイドブック』嵯峨野書院（初版 2002）.

水内俊雄 1994. 近代都市史研究と地理学. 経済地理学年報 40-1: 1-19.

毛利嘉孝 2003. 『文化=政治ーグローバリゼーション時代の空間叛乱ー』月曜社.

毛利嘉孝 2009. 『ストリートの思想ー転換期としての 1990 年代ー』NHK 出版.

矢部恒彦 2002. 東京スケートボーディング・スポットーパーク U, あるいは A 区運動広場ー. 現代思想 31-6: 72-80.

矢部恒彦 2004. 空間を開くー豊かさをうみだす仕掛けー. 10+1 34: 35-37.

山口覚 2001. 都市の民族誌ー個人・ネットワーク・場所ー. 関西学院史学 28: 86-110.

山口晋 2006. 東京都の文化政策「ヘブンアーティスト事業」と現代都市空間. 都市文化研究 7: 50-62.

山口晋 2008a. ストリートの地理ー研究動向の整理と今後の研究課題ー. 信州大学経済学論集 59: 1-15.

山口晋 2008b. 「ヘブンアーティスト事業」にみるアーティストの実践と東京都の管理. 人文地理 60-4: 1-21.

山口晋 2009. ストリート・アーティストによる空間創造とその管理. 神田孝治編『レジャーの空間ー諸相とアプローチー』93-103. ナカニシヤ出版.

吉見俊哉・北田暁大編 2007. 『路上のエスノグラフィーーちんどん屋からグラフィティまでー』せりか書房.

ルフェーヴル, H. 著, 齊藤日出治訳 2000. 『空間の生産』青木書店. Lefebvre, H. 1974. *La Production de l'espace*. Paris: Economica.

Thornton, S. 1995. *Club Cultures: music, media and subcultural capital*. Cambridge, Poltry Press.

Thrift, N. 2000. 'Not a straight line but a curve', or, Cities are not mirrors of modernity. In *City Visions*. eds. D. Bell and A. Haddour, 233-263. Harlow, Pearson Education.

Urban Studies on Cultural Practices on the Streets

Susumu YAMAGUCHI

This study aimed to organize some approaches to capturing cultural practices on the streets. Specifically, I wanted to understand the changes in the consumerist style from resistance in the subcultural theory of Cultural Studies. Next, I discuss methodological approaches to capturing cultural practices on the streets and focus specifically on the importance of ethnographic approaches. Furthermore, in order for street research to enrich the accumulation of urban studies, I examine the historicization of the streets.

Keywords : On the streets, Cultural practices, Ethnographies, Urban studies